第2節　若者の行為、交友関係の不可視性

第1節では、「非行」の定義の変遷に関する発話を示し、「非行」がある特定の行為に一義に付与される属性というわけではなく、むしろ、社会的なメカニズムによって可視的になるものであるという点を示した。また、現在の大人が、若者の行動に対して透明でないことも同時に指摘された。曰く、「まじめそうな子がキレたりする」、「外見からは分からない」といったように。そこで、第2節では、若者に対して抱いている、「行為の不可視性」に関する被調査者の発話に着目していく。その際、「非行少年」、「不良」とみなされる者の行為に限らず、若者全般に抱いている行為の不可視性の側面について示す。

第1項では、まず、携帯電話やインターネットといった今日的なコミュニケーション・ツールの普及によって生じる、若者の行動形態、交友関係の不可視性に関する発話について示す。加えて、コンビニなどに代表される、若者が集まる場の変化との関連についても提示したい。第2項、および第3項では、第1項を受けて、新しいコミュニケーション・ツールを介することにより生じる「友だち」の概念の変化、「遊び友だち」の変化について取り上げる。

第1項　若者の行動の不可視性

今日、若者の間で携帯電話やインターネットの普及が急速に進んでいることは周知の通りである。今回のインタビューでも、中学生・高校生の子どもを持つ親の大多数が、携帯電話などのトピックに触れている。そして、このようなツールの変化により、親が自身の子どもの交友関係などを把握し辛くなっていると語っている。つまり、若者の行動が、大人にとって不可視になっているのである。以下、具体的にScene.2-1～2-3にインタビュー結果を示す。

［Scene.2-1］グループ13　（Rは調査者、Sは被調査者の発話を示す：以下同）

S2：うん。だから例えば学校の、あの、なんていうか学習についていけなくって面白くない、ですよね、授業が、で、そしたらこう遊ぶ、そういう友だちで、たまたまそのおもしろい逆な、違った面白さを発見したら、学校に行かなくなっちゃって、結局そういう子達と遊び歩く。じゃあそっち行った、でどうしてって聞いたら、そっちがだって面白いもんっていうふうに、言うんですよね。だから、あの一どっかそういうこうなんか自分をわかってくれるその友だちとか

求めてる、ね、誰かを求めてるから、そういう行動にでるんだと思うんですよね、で、今は、そういったそういう子達がこう、あの、インターネット、ああいうので、結局人、あの、直接は人物を介さないで機械を通してのそのコミュニケーション、そういう場が与えられたわけでしょ、

R1：ああ、なるほど。

S2：今までだから、

S1：携帯もそうだ。

S2：そうそう携帯もそう。

R1：携帯もそう。

S1：携帯もそう。また、

S2：それでだからね、よけい複雑になったなあ、とは思うんですよ。

R1：なるほどね。

S2：だから一個人でね、ただ違ったそういう友だち同士で逆に一対一で、そういう人間同士とつきあいをやってて、するんだったら、まだこうなんか、立ち直れる、なんていうかな、ある程度セーブがね、親が把握しやすいがあるかな、と思うんですよね。だけどもう携帯とか、ああいうインターネット使うと、その、親自体も、その子の、が、どういうつきあいをしてるかっていうのは、把握できない。

R1：なるほど。

［Scene.2-2］グループ1

S2：そうね．携帯は、親が取り次ぐことがないから、誰からかかってきたっていうのは、全く分からない．いつ話してるのかも分からないし。

S1：うん。

［Scene.2-3］グループ7

S4：ところが、子ども達が高校生ぐらいになったときには、もうコンビニがそこらじゅうに氾濫してたから。

S3：あはは。

S4：もうお呼びじゃなくなっちゃったの。そして、もう、（遊びに）来る方も買って来たりす

るし、うちの子どもなんかも、その時間（おやつや昼食の時間）になっと、（コンビニに）買いに行ったり？ 買いに行ったりすると、もう（子どもが自分でおやつを）用意しといたりして、だいたい（遊びに）来る人が買って来たりすんのもあるんだけど。全然2階（子ども部屋）へ行く用事がなくなっちゃった。

S3：入る隙がないわよね。親の入る隙がない。

S4：だからそういう子ども達の顔を？ 何か（お菓子を）持ってって、小学校の頃は、一言二言...。

R1：うん。

S4：喋ってくんのが、すごくうれしかったんだよね。子どもの友だちが来るっつうのもうれしいし。

R1：はい。

S4：（おやつを）作って出すっつうのもうれしいし、それが高校生ぐらいになったら、全然なくなっちゃったの、それが寂しい。

S2：あー、わかるわかる。

S1：でもそうやって、子ども達が小学校のときっていうのは。

S3：そうだよね。実際ね。

S1：親が要するに、顔を出すっていう機会があったから、何をしてるかってのも、ちょっとは把握できたけど。

S3：そうそうそう。

S1：高校生になると、要するに親が顔出す隙がないから、

S3：もうシャットアウトだよね。

S1：何をしているのかがわからないっていう不安？

S4：そう。もうその頃はなんかコンビニがいっぱいできちゃったね。

S3：で、その頃からかなあ。ね。子ども部屋っていうのを結構持つとこ（家）が多くなってさ。（家を）新しく作ったじゃないですか。

S4：そう。うん。裕福になったのもあんだよね。

S3：昔は各家族でね。みんなそれなりにさー。おじいちゃん、おばあちゃんいてる？ 子どもがいて、孫がいて、なんてな感じで、きょうだいもいっぱいいたからあれだけど、みんな一人ひとりが、なーに、各部屋に閉じこもっちゃって、居間には、昔は居間って、みーんながこうワイワイやってたじゃない。それが、なんか。

S1：そうですね、みんなが同じテレビを見てって。

S3：みんなそれぞれ、分散して、シーンとしてるっていう感じ？

S2：それはあるね。

Scene.2-1、Scene.2-2 にあるように、携帯電話やインターネットといった新しいコミュニケーション・ツールの登場により、「子どもがどのようなつきあいをしているのか分からない」、「親が取り次ぐことがないから子どもの友だち関係が把握しにくくなった」との発言が得られた。

また、Scene.2-3 では、コンビニの普及によって親が子どもの食事の世話をする機会が減ったことが取り挙げられている。さらに、独立した子ども部屋を持つ子どもの増加し、家族団欒の時間が減少していることが、若者の行動を把握し辛くしていることにも言及している。その結果、親が子どもの友だちとコミュニケーションを取る機会が少なくなったと語られた。

上記のことから、携帯電話やインターネットといったコミュニケーション・ツール、コンビニなどの普及により、親が子どもの行動形態、交友関係を把握しにくくなっている現状を読み取ることができる。

第2項　友だちの概念の変化

第1項で示したように、若者の行動形態、交友関係は大人にとって見えにくくなってきている。Scene.2-3で「親自身が子どもだった頃の友だち関係とは違ってきているのではないか」と、不透明な子どもの交友関係に関する発話がなされていることから、若者のもつ「友だち」の概念が昔と現在では変化してきていることが考えられる。よって、第2項では、若者の友だち概念の変化というトピックに焦点をあて、検討していく（Scene.2-4～2-5にインタビュー結果を示す）。

［Scene.2-4］グループ11

R1：友だち関係で、ですか？お仕事で？

S3：両方や。

S2：友だちできんのとちゃうか？そんな気がする。

S1：でもワシら、飲んどるときにかかってきたらややな。

S3：でも、メールや携帯じゃ友だちたくさんおるけど、ほんとの友だちって今おらんと思う。私たちが子どもだった頃の友だち関係とは違ってきていると思う。メールや電話でしゃべるだけなら、会わないし、ホントの意味でのハートのつながりってやっぱり欠けると思う。電話やコンピュータで会話するって話、人と人とのつながりってなくなっていくと思う。で、それに対していろんなこと要求するけど、人間に対して。それは無理な話。それが日本の流れ。みんなそういうふうに片付けてしまうから、言葉のつながりがなくて、もっともっとひどい世界になっていくなと思う。表面的な。確かに便利になるけど、人と人との本当の意味での付き合いはなくなっていくから、もっともっと崩れていく気がする。ほんとに。だってしゃべらんもん。文字で置き換えて話すなんて、国の発展もないと思う。絶対。画面で処理されてる。今後人と人との会話って廃れていくような気はする。メールの友だちっていうけど、「その子はどんな人ですか？」って聞かれたときに答えられる子っておらんとおもう。単に数が増えているだけで、それは「友だち」とはいえないでしょ。

S2：いいと思うよ。俺はね。携帯があるから学校間の隔たりがなくなったし。いいと思うよ。携帯そのものは。便利やし。携帯電話やメールが安く通信できるし。下手な大人がだらだらしゃべってるよりゃ。うちの子どもは見ていても、知らない人と話してる様子じゃないし。便利や。迷子になっても平気やしな。世の中、便利やからみんな買うんでな。それが

高校生が買える値段やしな。

S1：ああ。

［Scene.2-5］グループ 11

R1：友だち関係には携帯電話が必要なんですか？

S1：不安なんじゃないかな？

S2：そうなんやね。確認しないと、絶えずつながってないと。

S1：おいてけぼりにされたっていうか、疎外感があるのかな。

S2：私ら、一週間会わなくても友だちは友だちで。

S3：いつも友だちを求めてて、だから、いないと不安。友だちがいないっていうのは罪悪感があるみたいで。たまにおらんでもいいがんねって思うんやけど。一人でいるのが寂しいらしくて。それだけでいじめられてるっていうわけでもないんやけど。すっごく、友だちいないのが耐えられない子が多くなってるのかな。親しい友だちがいないとだめらしくて。

S2：広く浅くってカンジらしいよ。友だちが悩んでるのを知っていても、声をかけない。

インタビューの結果、現代の若者に特徴的にみられる携帯電話やメールを介したコミュニケーションでは、「本当の意味での友だち関係を築けない（Scene2-4）」のではないか、また「広く浅くの友だち関係（Scene2-5）」の構築のみに留まるのではないかと語られた。携帯電話やメールに代表される、非対面的なコミュニケーションによって構成維持される、現代の若者の「友だち」意識に対して、大人が疑問を呈していることが分かる。そして、現代の若者の「友だち」に対する概念とは、以前のそれとは異なっていると認識しているようである。

第3項　遊び友だちの変化

第2項では、携帯電話やインターネットなどの普及に伴う、若者の希薄な友人関係に対する危機感が提示された。

第3項では、若者の遊び友だちの選択の仕方が、自分たちが若者であった頃とは異なる言及している箇所を取り上げ（Scene.2-6～2-8）、親の子供時代と現代の子どもの遊び友だちの違いについて明らかにする。

［Scene.2-6］グループ6

S5：昔は近所の子と付き合ってたけど、今は近所よりも同級生とか、学校の友だちとしか付き合わないよね。

［Scene.2-7］グループ1

S1：今の子どもたちって、縦には遊ばないんだよ。横でしか遊ばない。あれは、将来どうなっていくのか、危険なような気がする。

［Scene.2-8］グループ4

S1：いたずらとかをする場所も仲間も今じゃないから仕方ないんだろうけど。いたずらしたり遊んだりすることなんかも、近所の友だちと一緒になって覚えていったし･･･。友だちっていっても、3つも上のおにいちゃんから3つも下の弟分までいろいろいて、いっつも誰かと一緒だった。今はそうやって遊ぶこともあんまりないんじゃないかな。

S2：そうそう。自分が一番上なら、1年坊主がくっ付いて歩いてればそうはじゃけんにしない。何かの時には面倒見なきゃならない。川で泳いでいればその子を面倒見なきゃならないし･･･。そうゆうごっちゃごっちゃで遊んでたから。何にも入れてもらえなんだよね、庭で、皆で5年生とか6年生が遊んでたって、相手にはされないんだけど、そこにみそっかすで･･･。やっぱりそおゆうのをずーっと見てるから、どうしたらそこに入って一緒に遊べるかとか、そうゆう知恵が自然についてきたもんだと思うけど、今はもう外で遊ぶなんてことがないからしょうがないけど･･･。でも、それを補うのに、部活動は大切だと思う。でも、今の学

校は部活動をはずそうとしてる。生涯学習・社会教育の分野だということで、はずそうとしてる。確かにそう思うけど、今の社会を考えると、外に子どもたちが遊ぶところがない、外には害になるものばかりだし、だから、部活動は最後の砦で、あれをはずしちゃったら何にもなくなっちゃうと思う。せめて部活動とかは中学校・高校からなくさないで大切にしてほしい。それがなくなっちゃたら、子どもはもっと乱れていくと思う。

R1：やっぱり子どもたち同士の縦の関係とかが大切だと？

S1：そうそう。でもそれを知るのは部活動しかないんだもん、今は。それがなかったら子どもは、家に帰ったらゲームをやって3日だって5日だって楽しめるし、携帯電話でメールだけで遊べる。そうゆう時代になっちゃってるから。

S2：うんうん。

Scene.2-6「昔は近所の子と付き合ってたけど、今は近所よりも同級生とか、学校の友だちとしか付き合わない」との発言から、現代の子どもたちは、学校の同級生との横のつながりを中心に遊び相手を選択していることが伺える。一方で、Scene.2-7「昔はいたずらしたり遊んだりすることなんかも、近所の友だちと一緒になって覚えていったし…」とあるように、以前は近所の友だちとの縦の関係の中で遊んだ事が示されている。加えて、Scene.2-8「今の子どもたちって、縦には遊ばないんだよ。横でしか遊ばない。あれは将来どうなっていくのか、危険なような気がする。」と言及するように、現代の子どもたちの遊び友だちのつながりの形態に対して、大人が危機感を抱いていることが示唆される。